野間宏全集

第二十二巻

野間宏全集

第二十二巻

筑摩書房

野間宏全集　第二十二巻

一九七一年二月二十日第一刷発行

著　者　野間宏

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
郵便番号一〇一―九一
振替東京四一二三

本文印刷　暁印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社

（分類）0395（製品）71422（出版社）4604

目次

歎異抄 3
仏教のなかの私 223
自力について 228
現代のなかの仏教 230
親鸞 244
現代と仏教 252
仏教書を買いこむ 258
親鸞について 261
『末燈鈔』抄訳 263
戦争と末法時代の思想 269
日本人の宗教的心情 271
親鸞の思想 274
真継伸彦氏への反論 275

日本人 281
日本近代文学と仏教 303
〈対談〉現代に生きる親鸞 〈対談者〉増谷文雄 316
解説 森川達也 332

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

現代と宗教

歎異抄

現代にいきる仏教

人間の根元にふかくかかわる思想

わたしは日本仏教のいろいろな宗派に多くの関心をもっています。かなり前から、ふたたび仏教書をあつめだしたのですが、意外にいまの仏教書はありきたりのものばかりで、明治のころに書かれたような力づよい仏教書はきわめてまれであることを知りました。むかしのものも東京ではもとめられず、どうしても京都まで出かけていってさがさねばならない。ほんとうの仏教書を手ぢかにもとめられなくなってしまったということは、仏教が現代生活にあわなくなっている証明にもなるのでしょうか。

わたしがいま日本仏教のなかでいちばん関心があるのは、やはり浄土教、そののちの浄土宗と浄土真宗、それから浄土教からわかれて生まれ出た日蓮宗といった系列です。とくに平安から鎌倉にかけてこの教えをひろげた人たちの生き方につよくひかれます。そうした人たちが、もういちど日本に生

きないかぎり日本の仏教はほんとうのものにならない、とおもわされるのです。

仏教は日本の思想のなかで、わたしが考えているかぎりでは大衆をとらえた唯一の思想だとおもいます。外国から日本にはいってきた思想系列は、だいたい五つほどです。中国からはいってきた儒教、オランダからの蘭学およびヨーロッパの科学——これは医学とか工学その他のもの——それからキリスト教、マルクス主義、そして仏教です。このうちなにがいちばん日本人のこころをとらえたかといえば、この科学の方はいま別にしてやはり仏教でしょう。マルクス主義はたくさんの労働者をとらえているが、なお仏教が日本の国民ぜんぶをとらえたほどのひろがりにはなっていない。

このように、なぜ仏教は日本人の魂のすみずみにまでひろがりえたか。われわれはそのことをもう一度しらべなおす必要があるようです。

仏教もいわば最初は天台というかたちで比叡山の大学の講堂のなかにあって、ぜんぜん大衆のものではなかった。貴族を中心にした宗教にすぎなかった。それが国民全体のものになりえたのは、鎌倉期の、法然、親鸞、日蓮、道元といった人たちの努力によるといえます。しかしいまはこういう人たちの仏教の考えかた、その信仰の仕方、あるいはまたその人たちの大衆へのほんとうの接し方が現在も仏教にあるのかどうか。これをまず調べなければならないとおもうのです。

わたしが京都のお寺をまわってみて、いつも感ずることは、いかに寺院が観光客をお寺にみちびき、お寺を栄えさせるのに腐心する企業体となっているかということです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

もっとも、わたしは、このことをたんに非難めかしていっているのではない。むしろ、それほど観光客が寺院に出入するきっかけこそは、仏教が大衆に普及するきっかけであるにちがいないと考えるのです。が、実際には、それはかならずしも仏教が大衆のなかにはいっていくきっかけとはなっていない、という結論を出さざるをえません。

先年、わたしは『わが塔はそこに立つ』という小説を書きました。ある一人の大学生がいた。その大学生の家庭は父親と母親が在家仏教徒であったから、小さいときから仏教思想をそそぎこまれ、いずれは在家仏教徒として父親の跡を継ぐように育てられた。ところが、だんだん大きくなり、学問をするにつれて、仏教にたいする疑いがでてくる。唯物論的、あるいは無神論的な方向に自分の思想がむかっていく。それは仏教にある地獄とか極楽とかいう思想そのものに疑いをいだいたことにはじまっている。そこで思想的には仏教とは反対の方向にむかっていくが、どうしてもむかいきれない。そしてからだの半分は仏教のなかにとどまっている。そういう大学生が、鎌倉期において親鸞はいかに生きたか、親鸞の生き方をもう一度仲立ちにして現代に生きることはできないだろうか、と考える。そして仏教をもう一度現代のなかで考えなおそうとする。——簡単にいえばこういう作品です。

思想というものは、ひろいこと、ふかいことと同時にその思想がほんとうにおおくの人々のこころをとらえることによってはじめてその価値が証明される。思想はおおくの人々のこころをとらえ、生きる・死ぬ・愛する・憎むという人間のもっとも根元にあるはたらき、あるいは状況に最深のところ

から関係するものです。日本においてこれまでもっともよくそうした価値を証明したのは仏教だといってよいでしょう。

庶民大衆の心のなかに生きた親鸞

では、なぜ仏教が日本人のこころをとらえたのか。それをわたしは鎌倉期における仏教のなかに探らなければならない、と考えているのです。

鎌倉期というと、貴族から武家政治にうつっていく大きな変動期です。現代であれば、資本家階級がなくなって労働者階級の時代になる、といったような大きな意味をもっているわけです。その意味で、いまの日本とじつによく似ているのです。

日本における変動の時期は三回ほどあった。平安から鎌倉へいく時期と、戦国時代、それから明治維新。そのなかでも現代といちばんよく似ている時期は、平安から鎌倉期へうつるときです。そして、その時期に生まれた思想が、いまもなお日本の国民のなかにひろがっているのです。

文学作品でいえば『平家物語』とか『方丈記』とか『徒然草』とかが生まれている時期ですが、当時のインテリゲンチャのなかで、さらにふかい思想をもっていたのは、やはり仏教徒ではなかったかとおもいます。そのなかでも親鸞という人は、年がすすめばすすむほど思想のふかまっていく人でした。そういうふかまりは日本人にもたいそうめずらしいものだとわたしは考えます。

親鸞という人間を前へおいて考えるとき、ひじょうに希望が湧いてきます。彼の活動は非常に息が長く、著述生活に入ったのはようやく晩年に近くなってからです。『教行信証』は四十歳近くから書き始め七十五歳に完成。『浄土和讃』『高僧和讃』を書いたのは七十五歳。『正像末和讃』は八十五歳。『歎異抄』は彼自身の書いたものではないが、彼の七十歳から八十二―五歳ぐらいの話。『末燈鈔』は書簡集ですが、年代のわかっているものでいえば、八十歳から九十歳近くにかけて書いています。

この親鸞はわかいときに比叡山で学問をした。しかし位はそれほど高くないので労働をしながらの学問であった。二十九歳までそうしていたが、仏教は山のなかや、大学のなかなどにはないと考え、ついに寺をでて法然の弟子になった。それでも四十五歳まではほとんど勉強できなかったとおもいます。というのは、なにぶん、大きな戦乱時代であって、道端に飢えている人たちが数多くころがっていたのです。やがてすこし落ちついてきたのですけれども、親鸞の時代は全体としてやはりたいへん生きにくかった時期だったとおもいます。

この人はいつも奥さんに養ってもらっています。奥さんに食べさしてもらっている。歴史家によると二度奥さんをかえています。二度目の奥さんである恵信尼の手紙が大正十年に発見されたのですが、この手紙から親鸞がどういう暮しをしていたのかがはっきりしてきました。歴史家の服部之総氏が研究したのです。恵信尼は二十人ほどの奴隷をもっていた。その恵信尼のおかげで親鸞はようやく安定した生活に入り、その周囲の農民すなわち常陸の農民に仏教をつたえていくことができるようになる

のです。それまでは貴族相手であった仏教がこうして農民のなかにはいっていったのです。二十人もの奴隷をもっているというのはたいしたことのようですが、それほどでもなかったようです。手紙には、自分の使っている者も、食べものがなくて家に閉じこもっている、ということなども書かれています。このとき親鸞四十五歳ぐらい。わたしは、親鸞はこのころにはじめて日本人の庶民大衆のこころがどういうものであるかがわかってきたのではないかとおもう。そして親鸞は自身の考えるところが、この庶民のものであり、庶民のものにならなければならず、また庶民によってはじめてその支えを得ることができると考えたにちがいないとおもうのです。

しかし、まだそのころの著作にはそれほどすぐれたものはない。ほとんど書いていませんし、また書く時間などなかったでしょう。しかし、この時分常陸（ひたち）の農民と接触しそのなかに深くはいっていくことによって、外国から輸入された仏教をはじめてほんとうに日本のものにしていく道を発見したのではないかとおもうのです。常陸の農民たちというのは、もとは新潟にいて、そこで暮しが立たず借金をふみたおしたり、近所のものをかすめとったりして村にいられなくなり、山をこえてにげてきたものなのです。

親鸞がとり組んだ性と権力の問題

『歎異抄』に、罪が深ければ深いほど成仏できるという言葉がありますが、この言葉は親鸞がたんに

観念的に考えて使った「罪がふかい」という言葉ではありません。実際に親鸞のまわりにいたのは、罪人ばっかりだったといってもいいとおもいます。戦乱で、どろぼうをしなければ生きられない、あるいはまた人を傷つけなければ生きられなかった。そういう人たちが、自分の目のまえにあらわれてきたときに、そういう人たちのこころのなかへ、自分の思想を生かすのにはどうするか。

この問題ととり組まなければ、当時の日本人ととり組めなかった。そのことをほんとうに見出していったのは親鸞四十五歳ごろだったようにかんがえられます。それでも、まだ当時はほんとうに本を読む生活にははいりえていない。親鸞が本格的に著作生活にはいっていくのは、もうすこしあとで、恵信尼と別れて単身京都にのぼっていってからです。おそらく五十歳の半ばをこえてからではなかったか、と思います。

京に帰って親鸞は『教行信証』をしあげました。ところが、『教行信証』は漢字ばかりの文章で、大衆にはまったく読めないむずかしい作品です。ちかごろ、日本の文壇では純文学と大衆文学が問題になっていて、作家はたくさんの週刊誌に書くのにおわれるため作品の内容が低下している、したがって文学は停滞しているといわれている。内容をふかめようとすれば、むずかしすぎて大衆に読まれない。大衆に読まれるようにすると、内容が浅くなってつまらなくなる。これは文学の問題だけではなしに思想の問題でもある。仏教においてもしかりだとおもいます。親鸞もこうしたことに苦しんだのではないか。

親鸞は『教行信証』を完結したときにそういう問題にぶつかったのではないかとおもいます。かれは最後には漢字をすてて大衆に読みうるひらがなの世界にはいっていく。それはとうぜんそうした苦しみ、悩みのはてにゆきついたことでありましょう。そこでかれは和讃を書いた。つまり、当時は字が読めない人が多かったので歌によってひろめようとした。親鸞が『教行信証』を完結せずにそこのところまで行きえたかどうか、最初からいきなりほんとうの大衆化が可能であったかどうか、それは疑問である。やはり『教行信証』を書きあげて、そのささえでもって自分の思想のふかさ、ひろさ、の問題を解決しえたがゆえに、ほんとうの大衆化ができたのではないかとおもう。

そういう形で和讃の時期をすぎ、『歎異抄』『末燈鈔』の時代にはいって、ついに浄土教を日本ぜんたいのものにしえたとおもいます。

こういう生涯のなかで――わたしはわざと二つのことを抜かしておいたのだが――じつは親鸞には性の問題があった。親鸞は性の問題にすさまじくなやまされた。生涯をつらぬいてこの問題になやんでいる。それは法然なんかにはないことです。法然の顔はわたしの好きな顔です。育ちがよくて、温和な、やさしい、まるい顔です。親鸞の顔は癇癖がでていて、とくにわかいときの顔はきつい、いやな感じです。

当時の仏教徒の書いたものを読んでみると、いかに夢のなかで女性との対話を深刻にやっているかに、おどろくのですが、親鸞は、どうしてもその苦しみをたちえない。そしてどうしても戒を犯しそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.